

平成22年 5月10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520302

研究課題名（和文） 口承性から見た漢代文学の研究

研究課題名（英文） A STUDY OF LITERATURE IN THE HAN DYNASTY FOCUSED ON SPEAKING

研究代表者

釜谷 武志（KAMATANI TAKESHI）

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：30152838

研究成果の概要（和文）： 辞賦と楽府は口承性において本来共通していたが、後漢期に入って、辞賦の口承性が希薄化していくにつれて、本来保持していた機能の一部を楽府詩が担うようになったと考えられ、物語詩的な楽府詩は辞賦の変質と関連性があると推測される。また、漢代文学に特徴的に見られる時間の推移についての悲哀の感情は、人間の生きる時間が直線的で後戻りのきかないものであるという意識のほかに、罪の無い人間も禍を背負って生まれてくるとい意識が底辺にあったから生じたと考える。

研究成果の概要（英文）： Rhapsodies and music bureau poetry originally shared speaking. As rhapsodies reduced their speaking during the Eastern Han times, however, it seems that music bureau poetry came to shoulder a part of the function, which rhapsodies originally had, and narrative songs of music bureau poetry were related to the change of rhapsodies. And people had sorrows at the passing of time, because they understood that not only the guilty but the innocent are born with their sins as well as understanding that time is a straight line and we cannot go back.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ 各国文学・ 文学論

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

漢代文学史の専著として、たとえば趙明ほか編『両漢大文学史』（吉林大学出版社、1998年）がある。この1200頁近い巨冊

は、その分量と記述の詳細さにおいて類書を圧倒している。しかし、ジャンル別に作品を網羅しただけの印象を免れがたい。この時期においてジャンルを異にする作品がいか

に結びつき、いかなる関係にあったかの考察はほとんど見られない。

代表者は、「賦に難解な字が多いのはなぜか—前漢における賦の読まれかた—」（『日本中国学会報』48、1996年）において、前漢を代表する文学ジャンルである辞賦が、もともと皇帝や王を特定の読者として制作され、ほんらいは口頭で語られたものであることを明らかにした。その後、賦の受容形態が目を読むことに重点を置くように変わったのであれば、それはいつごろのことであり、その原因は何かという問題が出てくる。

これについては、前漢末期の揚雄を例にとって、儒家古典の引用を主とする創作方法の確立という点から考察を進めた。前漢末期から辞賦が変容していくのは、文人の身分が宮廷文人から学者的性格に変わることと儒学の成立とが背景にある点を指摘した。

また「漢武帝楽府創設の目的」（『東方学』84、1992年）・「詩と賦のあいだ」（『未名』21、2003年）などにおいて、民間歌謡を採集する役所である楽府が設立されたのは、漢の武帝がみずからの不老長生を実現するためであったとの仮説を提起し、近年出土した「神鳥賦」は物語的な内容をもつ楽府詩に近い性格をもつ辞賦であることを論じた。

そうであれば、辞賦と楽府詩とはこれまで全く別個のものにとらえられていたが、両者を区別する指標がメロディの有無、つまり辞賦はメロディをとまわず、楽府詩はメロディにのせて歌われるという点にあることに着目して、両者を口頭で語られる語り物の文学として統一的に把握できるのではないか。しかも、こうした語り物は往々にして記録に残らないが、たとえば敦煌から発見された唐代の文書に語り物があり、『三国志演義』に代表される近世の小説は語り物にみなもとをもっている。詩や散文に代表される伝統的な中国文学の作品以外に、非正当的な語り物の文学があったこと、それが前漢期にどのようなかたちで存在していたかを明確にできれば、中国文学史研究に寄与できよう。

2. 研究の目的

前漢・後漢をあわせた両漢期の約400年は、のちの2000年になんなんとする中国文学の基礎を形成した時期である。司馬遷の『史記』、辞賦の流行、楽府詩の隆盛、五言詩の発生、などいずれも後世の文学のいしずえ的存在である。

しかしながら、こうした文学ジャンル間相互の関係を明らかにして、両漢文学全体を視野に入れた研究は、残念ながらまだなされていない。数あまたある『中国文学史』をひもといてみれば、両漢文学についての記述は、前漢前期・前漢中期……といった時代順の記

述であるか、でなければ四言詩・辞賦・五言詩・楽府詩・歴史文学といったジャンル別の分類になっていて、両漢文学全体の特質が解明されているとはいいがたいのが実情である。

この研究では、まず漢代文学を代表する辞賦と楽府詩をとりあげて、これらを統一的に把握することを試みる。辞賦は皇帝や王を相手に文人が作ったもので、民間の歌謡を主とする楽府詩とは全く別のものとして理解されてきた。しかしながら、皇帝は民間歌謡を大いに採集させているし、民間の語り物としての通俗的な辞賦も近年出土した資料に含まれていて、両者の距離はこのほか近いように思われる。両者は何よりも、ほんらい口頭で語られたこと、口頭で歌われたことにおいて、共通点をもっている。

それが後漢以降に漢字が急増すること、紙の発明と流通などによって、紙に記載されて目を読むことに重点が置かれるようになって、がんらいの制作と享受の形態が分からなくなってきた。たとえば山の険しいさまを「嵯峨」と表記するが、前漢時期の出土資料を参考にすると、当時は同じ発音の「差我」と表記していたのが、後漢以降視覚的な美にうたえて山を部首とする漢字で表記するようになったと考えられる。つまり前漢時期こうしたジャンルの作品は、もっぱらその音を口で語りあるいは歌い、耳で聞くというのが、主たる形態だったのである。

あわせて、漢代文学の底流として存在する、時間の推移に対する悲哀、嘆きが何に由来するのかについて、思想的な背景をさぐる。

3. 研究の方法

(1) 辞賦の研究

後漢における辞賦の創作形態と受容形態を、作品の序や史書の記述を中心にして捜求する。それをもとにして、後漢のどの時期から、口頭性よりも書記性がさらに強まるかを考察し、かつその要因をさぐる。

(2) 楽府詩の研究

楽府詩を対象にして、楽曲の類別によって歌辞の形態がどのように異なるかを探求し、それをふまえて五言詩の発生についての考察を進める。

(3) 思想的背景の研究

発生初期の五言詩には、時間の推移に関する記述が多く、そのことはすでに多くの研究者が指摘している。しかし、なぜこの時期にそうした記述が増加するのかについては、いまだ明らかでない。この時期の思想的背景から、その原因を考究する。

(4) 辞賦と楽府の統一的把握

発生初期の五言詩に特徴的に見られる、時間の推移に関する記述は、後漢の辞賦においても見られる。この事実を出発点にして、同一主題を異なる文体で表現することがもつ意味を考察し、あわせて辞賦と楽府詩を統一的に把握するための指標を探求する。

4. 研究成果

(1) 辞賦の研究

辞賦は前漢時期においては、皇帝や諸侯王を主な読者対象としていたため、特定の読者の受容が目的となって、基本的には口頭性に基づいていた。前漢末から後漢にかけて、口頭性に加えて書記性が強まってくるが、それは後漢に入ってから賦に序が附されることと軌を一にしている。読者が不特定になってくれば、序において作品制作の背景を説明しないと、理解が困難になるからである点を明らかにした。

(2) 楽府詩の研究

前漢時期の楽府詩に関して、後世の宗廟歌に相当する「安世房中歌」が房中歌と称されるように后妃との関係性を示しており、郊祀歌も年少の男子が歌った事実があり、後宮の女性が弦歌したように、いずれも女性もしくはそれに近接した者が関わっている。口頭性が強い時期に後宮の女性が辞賦を朗読していたことを併せ考えると、辞賦と楽府詩とは大きな共通点を持っていることが明らかになった。

(3) 楽府詩における楽曲の類別について、やや詳しく成果を記す。

郭茂倩『樂府詩集』は、楽府詩を十二に分類している。郊廟歌辞・燕射歌辞・鼓吹曲辞・横吹曲辞・相和歌辞・清商曲辞・舞曲歌辞・琴曲歌辞・雜曲歌辞・近代曲辞・雜歌謠辞・新樂府辞の十二である。このうち、最もなじみがあるのは五番目と六番目に位置する相和歌辞と清商曲辞である。なかでも相和歌辞は、五言定型の「江南」古辞や、同じく五言定型の「陌上桑」古辞を含むことから、五言定型詩の成立と関係してしばしば言及されている。

しかし、相和歌がいつごろにまとまったのか、漢代においてどのようにあつかわれていたのかなど、必ずしも明らかではないところが多い。相和歌以外の類との比較を通して、その特質を考察した。郊廟・相和・雜曲・雜歌謠においては、時代を通して斉言体の比率が比較的高く、鼓吹・舞曲・琴曲においては、逆に比率が低いことが導き出された。

相和歌辞は鼓吹曲辞や舞曲歌辞、琴曲歌辞よりも、むしろ雜曲歌辞や雜歌謠辞と親近性をもっていることが知られ、このことは、相和歌辞の成立とも大きく関わっていると考

えられる。雜曲歌辞がもともと相和歌辞と類似していたが、時代が隔たったために所属する曲調の部類が分からなくなってここに入っているとすれば、両者において斉言体の占める比率が近接するのは理の当然である。また、雜歌謠辞に収録されている歌辞を見ると、漢代の作としては謠諺の類が少なくないことから、これも一種の民間歌謠に属するものであって、雜曲歌辞はもちろんのこと、相和歌辞とも親和性を感じさせるものである。

鼓吹曲や琴曲のように前漢以前からすでに伝わっていた曲をもとにして、歌詞を作成して調和させたものと、相和歌に代表されるように民間の歌謠や謠諺をもとにして、メロディをつけたり、楽器の伴奏をつけたりしたものにと大別でき、前者に雜言体が比較的多く、後者に斉言体が多く見られるのも首肯できる。

近世の演劇には楽曲系と詩讀系とがあり、前者は雜言体で填詞方式、俳優や樂人が演じて娯樂的要素が強いのに対して、後者は七言もしくは十言の斉言体で斉言句に音楽を施したもので、共同体の成員が演じて宗教的性格が強いという特徴がすでに先行研究で指摘されている。近世の演劇に見られる特質をそのまま古代中世の詩に適用することは慎まねばならないが、雜言体と斉言体の詩を考える際に、いくつかの示唆は与えられる。

メロディよりもリズムが大きく作用する斉言体は、民間の謠言や俚諺に、より多く見出されていて、斉言体の占める比率が高い相和歌辞や雜曲歌辞、雜歌謠辞に属する歌は、本来メロディを伴っていなかったか、あるいは伴っていても簡単な歌謠にすぎなかったものが、その後メロディがつけられたり、もしくは楽器との調和が図られたりしたのである。

相和歌辞は、もともとメロディに大きく支配されていた鼓吹曲辞や琴曲歌辞に属する歌曲と、一線を画していたというべきだろう。魏の曹植の作った楽府詩は、曹操や曹丕に比して、相和歌辞や雜曲歌辞に属するものが多いという事実は、歌の樂曲的側面よりも歌詞の面に重点が置かれていて、その意味で「曹植と陸機はともにすぐれた詩篇があるのに、曲に合わせるように樂人に命じなかったために、管弦の演奏とは無縁になった」(『文心雕龍』樂府篇)という事実と対応するし、また曹植の詩が唐以前において最高位にランクされるのも、樂曲面での支えがなくとも、十分愛誦に堪えうる歌詞と内容をもっていたから、つまり徒詩としての価値をもっていたからであると推測できる。

(4) 漢代文学の思想的背景について、やや詳しく成果を記す。

「古詩十九首」には、時間の経過と人間の

一生に対する不安や懐疑の念が見られる。其十五は、「生年百に満たず、常に千歳の憂いを懐く」と、人生は短いのに憂いが多く、それを救うためには、快楽を尽くすことが提示されている。人生のはかなさを述べる詩はほかにもあり、其の三では、「人間は天地の間に生まれて、まるで遠くへ旅する者のように行ってしまい帰ってこない」、其の十一では、「春に出会うものに去年のものはないように時間の経過は速くて、人も速く老いることから免れない。人の命は金石と違って、いつまでも長生きすることはできない」、其の十三では、「陰陽が果てしなく移りゆき、人間の命は朝露のようにはかなく消えてしまう」という。

死に至る時間の上に人間がいることの悲哀は、人生つまり人間の一生が有限であって、いずれ人間は死んでしまうのだという強い意識に由来する。こうした意識は、前漢の作品にもすでに見ることができる。

たとえば、漢の武帝の「秋風辞」で、最後の句「少壯幾時兮奈老何」は、迫ってくる老いを痛切に感じさせる表現である。また「郊祀歌」十九章の九番目に位置する「日出入」にも、死に対する恐れがうかがわれる。

人生が短い、人生が速く過ぎていくという表現は、すでに『左伝』『莊子』等にも見られる。が、こうした考えは先秦からすでに存在していたが、その意識が強くなり、悲しみも強くなるのはやはり漢代である。

では、漢代になってそうした表現がより強くなっていくのはなぜか。『太平経』を例にとると、「天地の間にいる普通の人間は、天地開闢以来ただ一度きりの人生しか与えられていないので、二度と生きることはできない。直線的な時間に従って生きている。しかも始めと終わりのある有限の直線である。

それに比べて、別の例では、天の道は常に存在していて、無くなることは無い、という。四季が移り変わって元に戻るのと同じであって、これは循環する時間をあらわしている。この二つの例を見ると、人の時間と天地の時間の違いが、実に鮮明に対比されている。こうした二種類の時間の対比によって、悲哀の感情はいっそう強まっていく。

さらに、「前の世代の人が犯した過ちを、後の世代の人に災禍として負わせる」という考えがあり、人は生まれながらにして罪を背負った存在だということである。

この考えと共通する表現を文学作品の中に求めると、班固の「幽通賦」が該当する。前世において人間の命運が決まっていることを示唆している。

天の道が長いのに対して、人間の一生は短いといい、また、先祖の善悪がめぐりめぐって子孫の禍福に影響するという考えも見られる。一つの家に限って、禍福が親・子・孫

三代に及ぶ例を挙げており、先の『太平経』の記述と併せて考えると、自分の祖先の行為だけに限らず、生まれた時から不幸や罪を背負っているという考えが、この時期にあったといえる。

以上、人間が生きている時間がいわゆる直線的な時間である点を、循環する時間との対比において強く意識していること、罪のない人間も生まれた時点で禍を背負っているという意識、この2つがこの時期の悲哀の感情を底辺でささえているといえよう。

(5) 漢代文学のとらえかた

後漢の辞賦にも楽府詩にも、時間の推移に対する哀しみや嘆きが記されている。ゆえに、辞賦が口承性を希薄化していくにつれて、本来保持していた機能の一部を楽府詩が担うようになったと考えられ、物語詩的な楽府詩は辞賦の変質と関連性があると推測される。ただ、社会の底辺層には物語的な辞賦や楽府詩に類するものがあって、それが後の「桃花源記」と「桃花源詩」、唐代の伝奇と詩歌の関係に連なると想定すれば、漢代文学における口承性が後世に続く道程、さらには文学史の展開が理解しやすくなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 釜谷武志、庾信の倫理と論理、創文、査読無、522号、2009、23—26

② 釜谷武志、両漢楽府詩考、未名、査読有、26号、2008、1—22

[学会発表] (計1件)

① 釜谷武志、推移の悲哀をささえるもの、日本中国学会第六十回大会、2008・10・12、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

釜谷 武志 (KAMATANI TAKESHI)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：30152838

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：